

式辞

中庭シンボル塔の傍らにあるコブシの鱗芽も大きく膨らみ、寒さの中にも春の兆しが訪れてまいりました。

本日ここに、栃木県教育委員会委員 吉澤慎太郎様をはじめ、多くの御来賓の方々、さらには保護者の皆様のご臨席を賜り、平成26年度・第30回卒業式が挙行できますことは、卒業生はもとより、本校職員・在校生一同大きな喜びとするところであります。

ただ今、鹿沼東高等学校の全教育課程を修了した232名の皆さんに卒業証書を授与いたしました。入学以来、たゆみない努力を重ね、自己研鑽に励み、人格形成においても成長を遂げてきた卒業生の皆さんに、教職員を代表し、心よりお祝い申し上げます。わが子の成長を願い、慈しみ育ててこられた保護者の皆様、お子様のご卒業誠におめでとうございます。そして、この三年間、本校の教育にご理解をいただき、様々な場面でご協力、ご支援下さいましたことに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

卒業生の皆さん。居並ぶ皆さんの表情からは、この3年間の満足感や達成感、みなぎる自信が見て取れます。授業における真剣な眼差し、部活動大会におけるひたむきさ、学校行事の盛り上がりとは清々しい笑顔。就職試験の面接や入学試験への集中力。この1年間、私が見た様々な場面における皆さんの様子に、活力と潤いある本校教育の優れた伝統が息づいていることを知りました。

皆さんがこれから生きていく時代は、予測不可能な時代といわれています。グローバルゼーションにより、政治・経済、文化など様々な側面において、今までの国家・地域の枠組みを越え、地球規模で資本や情報のやり取りが行われることとなることでしょう。また、驚くべき速さで進展する科学技術、情報技術の革新、少子高齢化などが、社会構造や雇用環境を大きく変えると考えられています。このような変革は、新たな価値や、課題解決のための知恵を生み出すとともに、かつてない対立や紛争、貧困等の問題を生じる背景ともなり得ます。「18歳選挙権」に向けての法案が今国会で成立すると見られていますが、そんな身近な出来事にも変わりゆく現代の社会背景が感じられます。

皆さんが生きてゆくこのような時代には、「持続可能な社会の構築」という大きな課題が与えられています。インディアンの教えには「地球、または大地や自然は先祖から相続したのではなく、子孫からの借り物」とあるそうです。

かつての日本人は、再生可能な資源の使い方をし、循環型社会を実現していました。昔の生活に後戻りすることはできませんが、私たちは、地球の恵みを使い尽くすことなく、社会を健全な状態で次の世代に橋渡ししていかななくてはなりません。そして、そのための

知恵と行動が求められています。

例えば、今、物に囚われないという生き方が確実に根付き始めていると感じます。「物を所有することが豊か、消費が大きいほど幸せである」という価値観が見直され、「断捨離(たつ、すてる、はなれると書いてだんしゃり)」という言葉も聞くようになりました。

「この地球上でどのように生きるのか、幸福な生き方とは何か」という命題について、これから、皆さんも問い続けていっていただきたいと思います。必要なのは問いです。問いのあるところにのみ、答えはもたらされるからです。

本日、本校を巣立って行く皆さん。一生が学びであります。青春時代に全てを完成させようと思わないでください。

まずは、日常の出来事や体験をただやり過ごすのではなく、発見する、感動する、そうしようと努める。いわば心の汗をかくことが大切です。そして、そこから沸き上がる想いを志まで高める。先を見定めたら、勇気をもって自らが取り組む、懸命に汗を流す。失敗してもあきらめない。

まさに、本校での学びそのものでありますが、どのような時代を迎えることとなったとしても本校で過ごした日々は、必ず、人生の折々で成長の糧となるものと信じます。

皆さんが飛び立つフィールドは、この鹿沼の地を中心とする地域、日本各地、または世界を股にかけてと様々でしょう。しかし、広い狭いではなく、全てのフィールドには、深さ、高さがあります。掘っていけば、また昇ってゆけば、地球の中心や宇宙で繋がるものです。どこにいても、自らの仕事・役割に全力を注ぐ人であってほしいと願っています。

詩人の星野富弘さんに「辛いという字がある。もう少しで幸せになれそうな字である」という言葉があります。逆境にあってじっと耐え忍ぶことは辛いかもしれませんが、しかし、自分の力を信じて、しなやかに力強く乗り越えていってください。

すべての卒業生の人生が、豊かで幸せに溢れたものとなることを祈って、式辞といたします。

平成27年3月2日

栃木県立鹿沼東高等学校長 大森 亮一